

平成23年 4月 5日

財団法人 笹川記念保健協力財団
理事長 紀伊國 献三 殿

施設名 医療法人姫路聖マリア病院

姫路市仁豊野650番地

医療法人財団 姫路聖マリア会

代表者 理事長 舞原節子



平成22年度ホスピス緩和ケアナース養成研究事業助成
に係る報告書の提出について

標記について、下記のとおり報告いたします。

記

- 1 研究・研修事業 平成22年度ホスピス緩和ケアナース養成研究事業
- 2 期 間 平成22年 4月 1日 ～ 平成23年 3月31日
- 3 報 告 書
 - I 事業の目的・方法
 - II 内容・実施経過
 - III 成果
(上記I～IIIをA4縦判・横書 6,000字程度にまとめる)
 - IV 収支報告
 - ①助成金の主な使途(人件費以外は領収書等の証憑書類を添付)
 - ②当該助成金に関わる部分の決算書「写」
(貴機関の全会計決算書でなく、当該助成計上部分のみで可)
*決算期の関係で平成23年3月18日(金)までに「写」を提出できないときは提出予定日を記入
(提出予定日:平成23年 月 日)
 - V 添付書類
当該施設の研修カリキュラム(パンフレットでも可)

I. 事業の目的・方法

1. 事業の目的

緩和ケアの実践の場にて、臨床実習に重点を置いた専門的な訓練を実施する。その実際から①ホスピス・緩和ケアの基本的理念や知識・技術・態度を習得する。②チームアプローチの実際を学ぶ。③自施設の課題に沿って必要な情報を得て今後の看護実践に役立てる。を目的として、財団法人笹川記念保健協力財団からの助成により「ホスピス・緩和ケア養成研究事業」を行っている。

2. 事業の方法

1) 研修場所：姫路聖マリア病院 ホスピス・緩和ケア病棟

2) 研修受け入れ期間

平成 22 年

上期（清瀬）：4 名

下期（神戸）：8 名

研修受け入れ人数：計 12 名

3) 研修実施方法

- ① 財団法人 笹川記念保健協力財団の「ホスピス・緩和ケア養成研究事業」の実習病院として研修生の受け入れを要請されたこと、および助成金の使用用途について伺書を提出して許可を得て受け入れのための準備をする。
- ② 研修の受け入れ窓口は、ホスピス・緩和ケア病棟とし、研修申し込み、宿泊などの受け入れは、総務部：岡田 として受け入れを行う。
常任理事、看護部長と相談して宿泊施設としてベタニア 103 号室 レオパレスを確保。ベタニア 103 号室に必要物品を確保する。
- ③ ホスピス・緩和ケア病棟の 700 号室に研修生のための研修室を確保、研修に必要書籍・パソコン 2 台（デスクトップ型、ノート型）ロッカー、冷蔵庫、机を設置。
- ④ 日本看護協会から研修生名簿を受け、研修に関する資料一式を研修生へ送付する。研修生名簿、研修予定を総務、経理、人事提出、連絡して研修への協力を依頼する。
- ⑤ 研修担当ナースを決定して、姫路聖マリア病院ホスピス・緩和ケア病棟の研修プログラムを作成し、研修生の研修目標との調整をすることにより研修効果が高まるようにする。
- ⑥ 研修中は研修担当ナースによる面接、定期的なカンファレンスにより、研修生の反応・意見、目標達成状況を把握する。

II. 内容・実施経過

1. 研修内容

1) 研修目標

- ① ホスピス・緩和ケアに必要な知識・技術・態度を習得できる。
- ② チームアプローチの実際を学び、その中での看護師の役割が理解でき、実践することが出来る。
- ③ 在宅ケアの実際を見学することにより、在宅に向けての必要な知識・情報の理解ができる。
- ④ 自施設における課題のための具体的な対策を考えることができる。

2) 研修期間

原則として3週間

3) 研修担当者

病棟責任者：田村 亮

病棟師長：森脇 由美子

病棟研修担当者：小谷 ルツ 内野 奈美子 小林 純子

研修指導者：日々の担当看護師

薬剤師担当者：福本 恵 岩崎 祐子

MSW 担当者：石田 綾

栄養士担当者：谷 綾子

ボランティア担当者：長野 晶子

キリスト教社会部担当：ハリー神父

4) 研修プログラム(添付書類)

2. 実施経過

1) 研修の経過

(1) 病棟での研修

① 病棟オリエンテーションの実施をする。

姫路聖マリア病院 ホスピス・緩和ケア病棟の理念・方針・医療倫理

姫路聖マリア病院 ホスピス・緩和ケア病棟の概要

2010年度 病棟目的・目標

ホスピス・緩和ケア病棟の看護方式・看護業務・記録・看護計画・教育について

アセスメントツール、STAS-Jについて

麻薬・常備薬管理についてなど

② 他職種（医師、医療ソーシャルワーカー、栄養士、薬剤師、ボランティア、キリスト教社会部）からのレクチャーを受ける。

③ 研修の調整をする。

研修生各自の目的・目標の確認をして研修スケジュール、見学 or 実施 or 受け持ちの体制などの調整を研修生とともにする。

④ 朝の祈りに参加する。

⑤ 毎日8時30分～9時30分のショートカンファレンスに参加する。

⑥ 日々の担当看護師とともに新患の受け入れ、看護ケアの実施をする。

⑦ ホスピス外来の見学をする。

⑧ 看取りの見学、体験（湯灌、エンゼルメイク、お見送り）

⑨ 緩和ケアチームのラウンド、カンファレンスに参加する。

⑩ リンパドレナージの見学（希望時）

⑪ アロマセラピーを体験する。（希望時）

⑫ ボランティアを体験する。

- ⑬ 病棟行事への参加をする。(希望時)
- ⑭ 訪問看護師とともに行動し体験する。(希望時)
- ⑮ ウォーキングカンファレンス、チームカンファレンスに参加をする。
- ⑯ 病棟勉強会に参加をする。(希望時)
- ⑰ 毎週金曜日と最終日にカンファレンスを実施する。

III. 成果

1. 研修の成果

上期、下期とも研修生全員が研修を終了して、「実習修了書」を発行することができた。
成果については、研修生の実習報告より報告する。

1) 実習目標の評価

①ホスピス・緩和ケアナースの役割について

- ・「ショートカンファレンスで一人一人の患者について、より深く話し合って観察・評価・目標の設定をしていることに、びっくりした」「フィジカルアセスメントの大切さを痛感した」「その人にあった日常生活の援助の必要であることを学んだ」「自施設における看護ケアの有り方を考えさせられた」などの感想から、多くの研修生が実習を通して自らの看護ケア、患者に接するときの姿勢を振り返りながら学びを深めていた。さらに、当病棟では患者家族参画型のウォーキングカンファレンスを行い、直接ベッドサイドに赴き、患者の状態に対してリアルタイムに対応し、かつインフォームドコンセントを踏まえたその場の治療方針の決定を行っている。そのやりとりを実際に見学してもらうことで、「患者と共有し同じ目標に向かっていくことの大切さを実感した」と、これまでとスタイルの違うカンファレンスに参加できたという感想があった。
- ・希望により研修2週目からは実際に受け持ち患者のケアに担当看護師と共に実践しながら、看護師の行動や考えや看護観に触れ、スタッフの一員として行動していた。患者とのコミュニケーションを振り返るためにプロセスレコードでまとめ、自身の傾向について振り返った研修生もいた。その中で、患者の希望に沿うことのみに重点を置いているのではなく、患者の状態に合わせたケア、より安全・安楽なケア、希望に沿ったケアや話し方、タイミングに注意しながら日々配慮している細かな行動とはどんなことなのか（視線・口調・態度など）、患者の言動やその内容の意味（価値観）などを考え、個々に学びを深めていることがうかがえた。
- ・担当看護師と同行しながら家族ケアの場面にも立ち会った。看取りの際に立ち会った研修生は、「看取りが近いときは不必要にバイタルサインをとらず、患者の呼吸状態やチアノーゼの状況を見ていた」と、家族が心の整理ができるように十分な時間と環境を与えることが優先されることをしっかりと捉えていた。ホスピスにおいて何が一番大切なのかを、日頃一般病棟で優先されやすいこととの違いを感じ取れたのではないかと感じた。

②症状マネジメントについて理解する

今年度カリキュラムが変更され、机上での症状マネジメントについて、医師からの知識の

伝授がなかったためか、症状マネジメントの知識や技術の実際について具体的に学ぶことを重視した研修生が多かった。症状マネジメントには病態生理の理解が基本であるため、研修生は実習において座学で学んだことを裏付けようとしていたと考えられた。研修2週目からは具体的な症状マネジメントを学びたいとの希望で、自ら受け持ち患者を選出し（患者・家族了承のもとで）その日の担当看護師と同行した。オピオイドローテーションの方法や、鎮痛補助薬の使用法、せん妄治療など、一般病棟では使用経験の少ない薬剤と治療の根拠などを積極的に学ぶ姿勢が見られた。研修生からは、「痛みの原因となるのは何なのか、なぜそのような症状が出ているのか理由を考えることの重要性を学んだ」「痛みによっていかに患者さんの QOL が下がるのかが十分に理解できた」「ケアの評価がタイムリーに行われている」「専門的な知識を持ってアセスメントを行い、患者の反応をみながらフィードバックする。この作業を繰り返していくことがその人を理解する、その人らしく生きることを支えるという意味なのだと実感した」などの感想があった。殆どの研修生は急性期病棟勤務で、医師を交えてのカンファレンスが困難な状況下であり、看護師が問題視していても業務に追われて行動に移せないジレンマがあるという研修生もいた。また、「患者の苦痛の原因について掘り下げて考えることができていなかった」という感想があり、症状マネジメントはまず患者に関心を持ち理解しようとする姿勢が大切であると自ら気づくことができていた。患者が抱える症状の分析、要因、背景、治療方針と期待される結果、評価というその繰り返すプロセスを共に学びながら、医師にも積極的に質問をして多くを吸収しようとする姿勢がみられた。

- ③チームアプローチの実際を学び、その中での看護師の役割が理解でき、実践することが出来る
- それぞれ専門性をもった職種ごとのレクチャーを受ける時間を 30 分ずつ設け、座学とリンクしながら他職種の活動の実際を直接学べる機会とした。また、1 回／週のチームカンファレンスに参加し、「チームに関わることの大切さや一般病棟にはない密な他職種の関わりがあることを知った」「それぞれの職種が患者・家族を支えるためにその専門性を発揮していた。それぞれ違う立場や視点から、専門的知識を持って関わることにより、患者をより多角的に捉え、一人では見つけることができない問題や解決方法を見つけることができることを学んだ」などの感想があった。他に希望者は実際にボランティアと同行し、ボランティア自身が大切にしていることやどのような気持ちで患者・家族に接しているのかを直接質問する研修生もいた。「ボランティア活動が活発で、心が癒され、生活に潤いを与えるボランティアの必要性を感じた」という研修生は、「自施設で自分の業務が優先だったところがあった。患者さんの思い、心を分かってく所、本当の看護ができるのだと感じたので日々の関わりの中で実行していきたい」と自身の行動変容を見出した研修生もいた。
- また、緩和ケアチームのラウンドに参加して、実際一般病棟の病室へ赴き、抗がん治療中の患者が抱える問題に対してどのようにアプローチしているのか、主治医や看護師とのやりとりについてなどを見学した。緩和ケアチームではホスピスとは違う他職種メンバーが活動しているため、カンファレンスの際の意見交換に関心をもって参加していた。「これから緩和ケアチームを立ち上げようと考えている。参考になった」「リンクナースとして積極

的に発信していくことの大切さが分かった。実際に症状で困っている患者さんが多い。治療にばかり目がいって、患者さんの苦痛が見えなくなっていた」という研修生は、自施設での状況とを対峙し、今後自分がどう行動に移すべきかを考えているのがうかがえた。

④在宅ケアの実際を見学することにより、在宅に向けての必要な知識・情報の理解ができる

現場で在宅支援に携わっている研修生が訪問看護に同行し、実際にがん疾患を抱える利用者宅を訪問することができた。しかし、当院の訪問看護ステーションではがん疾患をもつ利用者は少なく、研修希望があっても参加できない実情があった。当院の場合、がん疾患に限定すると訪問看護に参加できないことも考えられるため、今後その調整は検討する必要があると思われる。

⑤自施設における課題のための具体的な対策を考えることができる

研修開始前に必ず個々の行動目標とのすり合わせを行い、研修の途中で課題を見失わないよう研修生と確認をとりながら調整していった。その為研修生は常に課題を意識しながら「自施設に何を持って帰れるのか、まず自分はどんな行動を起こせるのか」と考えていることがうかがえた。「ホスピスだからできる」でとどめるのではなく、一般病棟でもできる緩和ケアとは何かを模索していると感じた。「まずは医師と看護師とのカンファレンスが行える環境をつくり、その中に専門職の方々の協力を得たい」「患者の立場に立ってケアを行い、アセスメント・評価を行うこと、様々な職種が協働し意見を出し合いながらチームで同じ目標に向かって取り組んでいくこと。ホスピスという場所に限らず重要であることが分かりぜひ実践していきたい」との具体的な行動を示すことができていた。

2) 研修施設受け入れ体勢について

研修スケジュールに沿いながら計画的に、かつ研修生の体調管理に影響することなく円滑に研修が遂行できるよう、その日の責任者を配置して調整を行っていた。また、ほぼ毎月他施設から研修生を受け入れるにつれて、病棟スタッフの緊張もほぐれ、研修生と協力しながらケアにあたり、時には意見を交え、お互いの看護観に触れながら刺激を受けることができたとの意見があった。研修生からも「話し方や患者の目線に合わせて話を聴く姿勢、各々が自分の行動・言葉に責任を持ち、患者へのケアを提供するだけではなく学びを得ているという人と人の関わりとして当たり前のことを行っている」という感想もいただいた。今までの研修生のレポートを病棟スタッフにも提示し、研修生たちが学んだことだけではなく、自分たちの姿勢が研修生たちにどのように映っているのか、あるいは他者が実体験した看護の学びをフィードバックできる機会としている。3週間の研修において、研修生の課題に即した内容を組み入れていくことで、個々の目標から逸脱しないようプランを組み立てることができた。しかし、研修生側から「研修生としてどこまで患者さんに介入していいのか分かりにくかった」との意見があり、受け入れ施設としての規約を提示しておく必要性があった。研修生としてはもっと積極的に関わりたかったという思いがあった。ホスピスでは特にスピリチュアルペインの表出に立ち会うことも多い。実際に研修生がその場に居合わせた時に、研修生としてどこまで関わっていいも

のか、研修生自身の精神的負担も考えられるため、実際にそのような状況になった時の対応についてあらかじめ説明しておく必要があると思った。

3) まとめ

今年度初めての研修施設として滞りなく受け入れることができるかどうかと思われたが、それぞれ違う環境で勤務する看護師との出会いと交流で多くの学びを得ることができた。一般病棟で緩和ケアを普及させたいという志の高い研修生に対して、ホスピスのスタッフとして何が伝えられるのかを常に問われる立場でもあり、看護の質をいかに行動で示すことが大切かを教えられたと感じている。ケアの方向性が見つからない時、苦悩を共に体感し、共に考え学び成長できるような関係性を築いていくことで、病棟スタッフが刺激を受け、患者・家族のよりよい QOL を目標としたケアの提供へとつなげていけるのではないかと考える。その為には、研修生が積極的に自主性のある研修ができるような環境づくりを常に目指していきたいと考える。